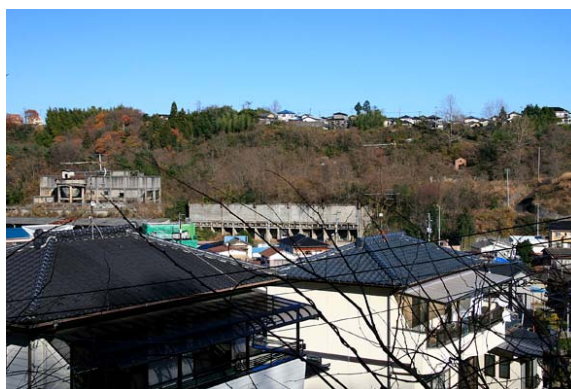


## 内郷地区の近代化炭鉱産業遺産（常磐炭礦近代化産業遺産群）

### ① 内郷地区・住吉一坑地区の概説

この「住吉地区」には旧磐城炭礦及びその後の常磐炭礦の近代化の中で建設された採炭・選炭・運送等の施設・設備及び現・金坂団地となっている地域の旧住宅団地が背後に、そして前面に宮地区（宮川流域～流域沿いに専用鉄道が綴駅に向けて敷設され、橋台・橋脚等が残る＝後述）の炭鉱住宅・映画館・娯楽施設等が広がり、一大炭鉱施設・集落が密集して構成されていた。また背後の丘陵上にも金坂グラウンド・炭鉱住宅・商店街、山神社等が配置されていた。

各論で既述したように炭鉱施設と生活施設・関連施設は集合して、かつ坑口の移動とともに各施設も移動するという特性を有しており、その度に建設・取り壊し・移転等が繰り返されるため、このように全体的に炭鉱社会の姿・形のありようをある程度まとめて見ることができるのは極めて珍しいといえる。これらの施設等は、昭和41（1966）年に常磐炭礦の採炭終了とともに閉鎖され、若干の環境整備等がなされているものの、ほぼ放置されている。産業遺産のみならず産業史的にも重要な意味のある施設であり、今後、施設の補修・維持や保存、有効な活用策等が大きな課題であるといえる。



住吉坑全景、中央が水中貯炭場、左端が選炭場

## ② 磐城炭礦内郷礦住吉一坑坑口

産業／石炭採掘用出入口／いわき市内郷宮町金坂／常磐興産株式会社

大規模炭鉱の典型的な構造の坑口である。(写真参照) 正面に向かって左が本卸し(石炭・炭車専用の運搬用、本線ともいう)、右側が連卸し(坑夫の昇降・人車坑)である。本線は大正時代の築造で煉瓦と石積みにより築造された。現在は坑口がコンクリートで密閉され、常磐興産(株)が計画的に維持・管理し、いわきヘリテージツーリズム協議会等が除草等の景観整備に努めている。現地は社有地であり見学等には許可が必要である。

この地域の産業遺産は常磐炭礦(株)が戦後の発展、国のビルドアンドスクラップ方針からの生き残りをかけて大規模機械化・合理化を展開した結果としての大規模・産業の近代化建造物であった。しかしその有効活用は短期間で消失し、石炭産業自身が消滅へと歩み始め、炭鉱産業建造物の遺産として放置されたままとなっていった。



住吉一坑 坑口風景

③ 常磐炭礦（株）選炭工場

産業／石炭商品化選別施設／いわき市内郷宮町金坂／常盤興産株式会社

略史として記述したように、この地は常磐炭田の歴史の抽象的な場であり、石炭産業の近代化・機械化の進められた地域である。中でもこの中央選炭の場所が「選炭工場」というネーミングで稼動していたことから推察できるように常磐炭礦（株）がその持てる技術力を発揮して、地下の採炭現場と一体化して採炭・坑内運搬・選炭商品化・鉄道搬送と総合的な施設の建設を行ったところである。昭和27（1952）年築造、コンクリート造り。



中央選炭工場建物風景

#### ④ 常磐炭礦（株）水中貯炭場・万石

産業／石炭運搬用貯蔵施設／いわき市内郷宮町金坂／常盤興産株式会社

常磐炭礦が石炭の品質向上で商品価値の高い石炭を確保しようと、国内初の画期的な水中貯炭施設として、昭和29年に建造したものである。この施設の上方の選炭施設から送炭された石炭をここに一旦貯蔵し、その前面に広範囲に広がる専用鉄道の蒸気機関車等に積み込み、常磐線綴駅に石炭貨車を集結させ、そこから関東圏に販売するため隅田川駅に集約された。もともと石炭塊は地表面に放置しておくとも簡単に剥落・風化してしまい燃料等の商品としての価値が著しく減少する。それを防ぐための方法として機械化された選炭作業での選別から直ちに水中での保管へと連結して商品価値の確保を図ろうとした施設である。昭和27（1952）年築造、コンクリート造りで当時としては最先端を行く施設であった。

この貯炭施設の下部は石炭を近くの常磐線綴駅（現・内郷駅）に搬送する専用鉄道が敷設され、蒸気機関車に牽引された炭車（石炭専用の運搬用貨車）が列をなして控え、上部からの石炭を貨車に詰め込んで駅へと搬送した。



水中貯炭場建物風景

⑥ 磐城炭礦・扇風機上屋

産業／坑道通風機設置上屋／いわき市内郷宮町金坂／常盤興産株式会社

坑道には入気、排気の施設の設置が、その保安や採炭効率からも欠かせない。この扇風機上屋はそのための排気坑の上部に設置した建物である。磐城炭礦株式会社は大正6年、高坂坑（後の住吉一坑）開削に伴い築造された。コンクリート・赤煉瓦造り。



扇風機を設置した建物上屋風景

## ⑦ 宮地区の炭鉱住宅と集落構成

内郷地区は湯本地区同様、炭鉱産業の歴史とともに歩んできた。その中心企業が明治16年操業開始の旧・磐城炭礦株式会社であった。更に同30年、常磐線が開通するとともに綴駅（現・内郷駅）は石炭積み出し駅として活況を呈し、同地区を東流する白水川（上流に石炭露頭発見の地とされる弥勒沢がある）と宮川の流域谷筋（宮地区～阿武隈丘陵地を下刻する宮川の谷頭部の高台と谷底平野からなっている）には磐城炭礦内郷坑ほか、中小炭鉱が乱立し人口が集住、一大炭鉱集落構造が成立した。その後、昭和44年には内郷・住吉炭礦は閉山し、ズリ山は放置され、宮地区は炭都としての機能を失った。

その宮地区には職員住宅（炭住）、八百屋、魚屋、菓子屋、お茶屋、洋品店、米屋など軒を並べ、時に竹の内銀座ともてはやされた時代は消えて久しいが、いわゆる炭住は現存・現住し利用されている。宮地区の炭住集落は丘陵に採炭関係の施設が立地し竪坑を中心に巻場、扇風機・選炭機・発電機等、主としてイギリスやドイツ製の機械関係が配置され、赤煉瓦造りであった。

現在の宮地区は当時の面影は殆ど残されておらず、職員住宅は四階建ての市営アパートに、職工住宅や坑夫長屋は個人分譲住宅へと変貌した。



ある炭鉱住宅の例

⑧ 旧三星炭礦汽缶場煙突

産業／石炭堀削・排気煙道・煙突／いわき市内郷白水町大神田／常磐興産株式会社

通称・赤レンガ煙突と呼ばれ、標高60メートルの丘陵上に高さ約15メートル、基礎部分の直径3メートル、排出煙道口直径2メートルの排気用の煙突である。現在、常磐製作所（かつて常磐炭礦の機械等製作部門であった所）として営業をしている場所の背後の山麓にあり、



通称・赤レンガ煙突建物風景

当時は三星炭礦蒸気機関設置場所で坑内の排気用に使用した煙道である。現在、剥落が多く、その下の煙道、坑口ととももの接近観察が危険で立入禁止となっている。明治42（1909）年築造、当初の建造記録によれば高さが50.82メートル、中径2.57メートルであった。

⑨ 三星炭礦ズリ山跡

産業／不良廃棄炭（ズリ）置き場／いわき市内郷綴町大神田／常盤興産株式会社

三星炭礦株式会社は明治30（1897）年設立、同42年、綴豎坑に機械化導入したが、大正2（1913）年突発的な出水事故が発生し水没し、磐城炭礦に譲渡された。稼業時の石炭滓（ズリ）捨て場がズリ山である。その殆どが閉山とともに放置されていたが、自然崩落等で危険ともなり、植林が施されて、鋭角なズリ山は山林となって炭鉱地域の象徴的な景観は自然の中に埋没していった。その中でも三星炭礦のズリ山は三角形の山形を維持して荒れた山肌を見せている。前述の赤煉瓦煙突に向かって左側（東南）に姿を現している。



三星炭礦ズリ山跡風景



⑩ 内郷地区のその他の関連施設跡

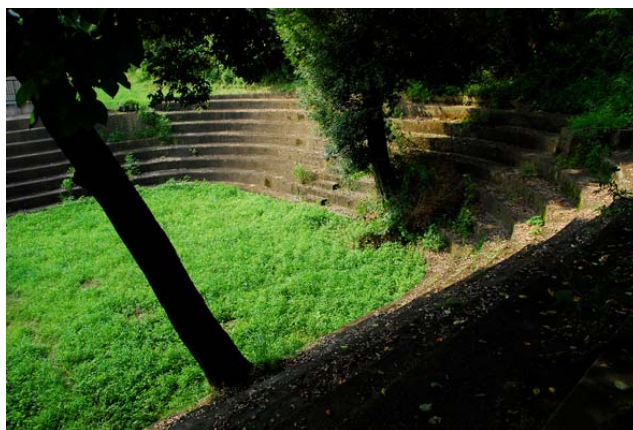
■内郷山神社と相撲場跡地

産業／炭鉱生活関連施設／いわき市内郷内町前田／いわき市



内郷山神社と実際はその上にある母子想像

炭鉱町には山神社が祭られ、地域の祭礼や行事の舞台となっていた。常磐炭礦磐城礦業所は内郷の炭鉱各地にあった山神社を合祀、新社は昭和26(1951)年に完成し、頂上には母子想の彫像(佐藤忠良・作)、弓道場や相撲場があった。現在は石炭産業の消滅を受け、内郷山神社は湯本町の山神社に合祀されている。



相撲場の風景

(大谷 明)